

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 5 日現在

機関番号：30106

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21590575

研究課題名（和文） 乳がん・子宮がんの検診受診率向上につながる医療リテラシー改善に関する研究

研究課題名（英文） Study on the improvement of health literacy among Japanese women in order to enhance cancer screening participation

研究代表者

大島 寿美子 (Sumiko Oshima)

北星学園大学・文学部・教授

研究者番号：60347739

研究成果の概要（和文）：

20代前半の女性を対象にがん検診受診率向上につながる情報提供のあり方を検討した。検診受診率は10%程度と低く、がんのリスクや検診に関する理解は進んでいなかった。また、乳がんと子宮がんの検診について区別できていなかった。自分の年齢での検診の必要性を認識していること、家族と検診について対話していることが子宮がん検診の受診意志に関係していた。年齢、がん種ごとに検診の必要性に関する情報提供と、家族からの働きかけが検診受診を促進する可能性が明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：

This study explored the ways information regarding cancer screening is provided among women in their early 20s in order to enhance their participation rate.

In the survey conducted among Japanese women in their early 20s, the current participation rate was as low as about 10%, and the level of understanding of cancer risks and merits of being screened was low. They were not able to distinguish the difference between breast cancer screening and cervical cancer screening when asked about the needs and importance of participating cancer screening for their age group.

Whether one has an intention of taking a cervical cancer screening or not was influenced by how much recognition she has towards the necessity of taking a screening for her age group, and also by conversations about cancer screening she has with her family members.

This study identifies two factors that may help promote young women in their early 20s to take part in the cancer screening: provision of cancer information depending on age groups, and encouragements given by family members.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：境界医学・医療社会学

キーワード：地域医療学、がん検診、子宮がん、乳がん、医療リテラシー、がん検診

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

がんは、我が国において 1981 年より死因の第 1 位であり、1 年間に約 60 万人ががんに罹患し、年間 30 万人以上ががんで亡くなっている。生涯のうちがんにかかるリスクは、男性で 2 人に 1 人、女性で 3 人に 1 人であり、いまやがんは「国民病」といわれるようになった。

がん対策の推進を図るため、2006 年の「がん対策基本法」に基づき 2007 年に「がん対策基本計画」が定められた。基本計画は、5 年以内がんに死亡を 20%削減するという数値目標を定め、目標達成のためにがん検診の受診率の目標値を 50%以上に上げることを 7 つの重点項目の一つに掲げた。計画策定時のがん検診の受診率が 10~30%であることを考えるとこれは大胆な目標であり、実現すれば早期発見、早期治療により 4%死亡率が減少すると見込まれている。

しかしがん検診事業を担当する都道府県のほとんどが受診率の目標達成を困難視しており、計画策定に関わった厚生労働省の審議会「がん対策推進協議会」でも悲観的な発言が相次いでいる。つまり、受診率の数値目標は単なる「かけ声」に終わっており、目標達成のための効果的な手段が見いだせていないのである。

特に、乳がん、子宮がんなど女性のがんの検診は、日本における受診率が 10~20%であるのに対し、アメリカ、イギリスでは乳がんが 70%以上、子宮がんが 80%以上と格差が大きい。そのため今後、乳がんと子宮がんの検診受診率の向上が政策上の大きな課題となっていくと考えられる。このような事態を解決するためには主体的、能動的な受診が必要であり、そのための基礎研究が望まれている。

2. 研究の目的

20 代前半の検診初診年齢の女性のがん検診に対する意識を明らかにし、低い受診率の背景にある文化的、心理学的な要因を分析するとともに、がん検診の受診に伴う不安や精神的苦痛の軽減につながる「患者教育」をめざし、個人の価値観や文化的要因を尊重した情報提供手段を開発することを目的とした。

3. 研究の方法

文献調査、聞き取り調査、質問紙調査を行った。

文献調査では、がん検診に日本人女性のがん検診受診率に文化や価値観が与える影響を明らかにするための予備的検討として、乳がん及び子宮がん検診の受診態度に文化や

価値観が与える影響に関する英語文献のレビューを行った。乳がんについては検診方法としてマンモグラフィー、子宮がんについては子宮頸がんの細胞診を対象とし、コクランライブラリーのがん検診に関するシステムティックレビュー論文などを参考に検索語と検索式を決定した。データベースは、医学分野として MEDLINE、看護学分野として CINAHL、心理学分野として PsychINFO を用い、1990~2008 年に発行された文献を検索した。検索により得られた文献について、受診態度に影響を与える文化や価値観を抽出して分類し、記述的に考察した。

聞き取り調査では、20 代前半の女性を対象にフォーカスグループインタビューと個別の in depth interview を行った。

質問紙調査では、20 代前半の女性にがん、がんのリスク、がん検診に関する意識を問う調査を行い、因子分析とロジスティック回帰分析によって検診の受診歴や受診意思に関連する要因を経年的に検討した。

4. 研究成果

文献調査では、検索式により、3 つのデータベースから、乳がんは 572 件、子宮がんは 369 件が得られた。重複文献を削除後、タイトルから、選択基準、除外基準に従って文献を抽出削除し、乳がん 280 件、子宮がん 176 件を得た。得られた文献のアブストラクトについて同様の作業を行い、乳がん 73 件、子宮がん 46 件を抽出して統合し、重複した 5 件を除いた結果、114 件が得られた。この 114 件を対象にさらに本文について選択基準、除外基準に従って抽出作業を行い、最終的に抽出された 68 件を検討の対象とした。論文の形態別では、調査研究論文が 62 件、レビュー論文が 6 件となった。抽出された文献について、本文を通読し、コーディングシートを作って「研究対象者」「研究の行われた国」「研究方法」「対象者数」「分析方法」「受診態度と文化、価値観との関連」などについて内容を要約した。さらに、「受診態度と文化や態度、価値観との関連」について、要約した内容の類似性に従って質的に分類した。

その結果、「悲観的な見方」「がんの罹患を運命や神の仕業とする見方」などを内容とする<宿命論>、「性を神聖視する価値観」「性をプライベートなものとする見方」などからなる<性に関する慣習や文化>、「家族を優先する見方」「家族のために自分がいるという考え」などを内容とする<家族に関する文化>、「自分の健康は自分で守るという見方」「検査をしたり話をすることが病をもたらすという考え」などからなる<健康と医療に

対する価値観の4つのカテゴリーが抽出された。エスニックグループにより検診受診率に差があり、その要因として文化や価値観が何らかの影響を与えている可能性が指摘されていることから、今回見いだされた4つのカテゴリーにみられるような文化や価値観と日本人女性の検診態度との関連について研究を進める必要性が示唆された。

聞き取り調査では、15人の20代前半の女性を対象に、がん検診の経験、がん検診に対する意識についてフォーカスグループおよび個別のインタビューを実施した。

その結果、がん検診受診者、未受診者に関わらず、がん検診に関する知識がほとんどなく、教育を受ける機会もないことがわかった。また、検診への関心を持つきっかけとして「家族との会話」「家族の中にがん経験者がいること」「メディアからの情報」が影響を与えていることが明らかとなった。

検診受診者は周囲からのすすめが影響を与えていた。また未受診者は必要性を認識していてもがん検診への恐怖心や婦人科への抵抗感と羞恥心から受診にいたっていないことがわかった。

質問紙調査では、2010年は20～24歳の回答者による329名分、2011年は298名分について分析した。2年間の調査でいずれも子宮頸がん検診受診率は10%と低く、検診クーポン券の利用率も低かったが、検診意志のある者の割合は高いことが明らかとなった。



図2. 子宮がん検診受診歴(n=298)

また、乳がん検診と子宮がん検診がほとんど区別されずに理解されていることが明らかとなった。

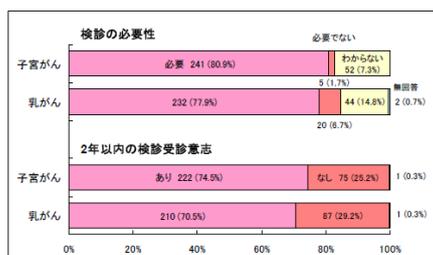


図5. 子宮がん・乳がん検診の必要性に関する認識と検診受診意志(n=298)

因子分析により各因子とがん検診の受診行動や受診意志、がんやがん検診への接触度との相関を調べたところ、「2年以内の検診の意志」及び「がん検診について家族と話した経験」が「他者の期待」因子と比較的高い相関を示した。また、「他者の期待」、「健康管理の利益」、「がん罹患のリスク」については検診受診経験者が未経験者より有意に高い得点を示し、「がん検診の障壁」については検診の未経験者が経験者より高い得点を示した。

ロジスティック回帰分析では、2年以内の受診意志と「自分の年齢での検診の必要性」「がん検診について家族と話した経験」との関連が見られた。

以上のことから、家族からの働きかけががん検診の受診行動に促進する可能性が示唆された。また、婦人科や子宮がん検診に対する心理的な抵抗感が検診受診の障壁となっていると考えられ、年齢とがん種に応じた適切な情報提供や検診環境の整備を通じた働きかけが受診率向上につながる可能性が示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

大島寿美子、前沢政次「がん検診の受診態度に文化が与える影響：乳がん、子宮がんを対象にした文献レビュー」北海道公衆衛生学雑誌、査読あり、第23巻、2010年

〔学会発表〕(計6件)

大島寿美子、前沢政次「がん検診の受診態度に文化が与える影響：乳がん、子宮がんを対象にした文献レビュー」北海道公衆衛生学会、2009年11月13日、札幌医科大学(札幌市)

大島寿美子「子宮頸がん検診初診年齢の女性の子宮がん、HPVに対する知識と受診行動に関する探索的調査～保護者を通じた情報伝達の可能性～」第29回日本思春期学会学術集会、2010年8月27日グランドパーク小樽(北海道小樽市)

大島寿美子、田辺睦子「女子大学生の子宮頸がん検診受診行動に与える要因の検討」日本健康心理学会第23回大会、2010年9月11日、江戸川大学(千葉県流山市)

大島寿美子、前沢政次「子宮頸がん検診の無料クーポン券が若年成人女性の検診受診行動に与えた効果の検討～女子大学生を対象にした質問紙調査の分析～」第69回日本公衆衛生学会、2010年10月27日、東京国際フォーラム(東京都)

大島寿美子、田辺睦子、田辺毅彦「女子大学生の子宮頸がん検診受診行動に与える要因

の検討2 - 受診行動意識の継時的変化の検討」日本健康心理学会第23回大会、平成23年9月11日、早稲田大学（東京都）
大島寿美子、前沢政次「子宮がん検診初診年齢の女性の子宮頸がん、HPVに対する知識と受診行動」第63回北海道公衆衛生学会、平成23年11月11日、WEST23（札幌市）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大島 寿美子 (Sumiko Oshima)
北星学園大学・文学部・教授
研究者番号：60347739

(2) 研究分担者

前沢 政次 (Masaji Maezawa)
北海道大学・名誉教授
研究者番号：90124918
北澤 一利 (Kazutoshi Kitazawa)
北海道教育大学・教育学部・教授
研究者番号：00204884 (1) 研究代表者